



新潟の水辺だより

Vol.57

●編集発行 特定非営利活動法人新潟水辺の会●発行日 2002年12月7日 Vol.57

ダムに頼らない治水は可能か？

大熊 孝（新潟大学工学部教授）

1・はじめに

2002年9月1日の長野県知事選挙で、「脱ダム」を主張してきた田中康夫氏が得票率64.28%で圧勝した。民意は「脱ダム」を容認したといえる。

私は昨年6月に長野県治水・利水ダム等検討委員に選任されてから、1年4ヶ月あまりで35回にわたって長野に行き、1回8時間前後の公開討議に参加してきた。この間、議論は「ダムの治水上の必要性」に集中した。この委員会は15名のうち5名が県会議員であり、その議員委員は1名を除いてダムの必要性を主張した。また、県の技術職員を中心として構成された幹事団も、中立であるべきだが、ダム建設が最適な治水と主張し、一歩も引こうとしなかった。

これがギネス級の時間を費やした委員会の実態であるが、結論として6月7日に浅川ダムと下諏訪ダムを中止し、それぞれの治水目標である基本高水を下げることが答申した。田中知事は、基本高水の引き下げには賛同しなかったが、ダム中止を打ち出し、結果的に県議会から不信任され、選挙となった次第である。

一方、新潟県でも、36年間調査段階にあった清津川ダムに関して、専門委員会が設けられ、1年間に12回の議論の末、7月5日に「ダム実施計画調査の中止が適当である」という答申が出され、7月29日の国土交通省北陸整備局の事業評価監視委員会で正式に中止が決定された。この専門委員会は私を含む学識経験者8人で構成され、議論は公開され、1回の会議時間はほぼ2時間であった。だが、ここでも事務局はダムの必要性を強調してばかりいた。

私は、この両委員会で、利水に関しては、将来の人口減少を前提として責任ある水需要予測が必要であることや、既開発のダム群に未利用水があることからその転用を優先することを主張した。

また、治水については、ダムによる治水が絶対的な“唯一解”ではなく、相対的な選択の問題であり、治水の安全度をどのように設定したらいいのかを、水害の受忍限度との兼ね合いで、住民意見を反映しながら決定すべきであることを主張した。以下に、その主張の論理を述べ、皆さんの御批判をおおぎたい。

2・ダムは劇薬—最後に頼るべき手段—

ダムとは、日本では岩盤基礎から15m以上の高さのものと定義されており、平成13年度末で2734基が存在している（朝日新聞、2002年8月11日朝刊）。即ち、日本の川でダムのない川は数えるほどしかなく、ダムのない自然の川はまさにレッドデータブックに載せられるべき貴重種となっているのである。今や、この貴重種を保全することが緊急の課題といえる。

川は、本来土砂を流し、下流の沖積平野や海岸線を形成してきた。また、森林から流れる落ち葉は、酸素の供給のもとで分解して生物の栄養となり、川や海の生態系を支えてきた。さらに海から帰ってきた鮭や鱒、鮎等が熊や鳥などに食べられることによって山に海の元素が持ちこまれ、森林を豊かにする要因になっていた。さらに日本人は、こうした生物を食料として、縄文時代以来、川沿いに高度な定住文化を形成してきたのであった。こうしたことを考慮し、私は川を以下のように定義している。

『川とは、地球における物質循環の重要な担い手であるとともに、人間にとって身近な自然で恵みと災害という矛盾の中に、ゆっくりと時間をかけて地域文化を育んできた存在である。』

このように定義される川にとって、その物質循環を遮断するダムは基本的に敵対物と位置付けられる。ダムは、建設時に周辺環境を破壊するだけでなく、いずれ土砂で満杯となり、機能を失う必

(P2へ続く)

然にあり、落ち葉は水中で無酸素状態でヘドロ化し、水質は悪化し、下流の河床低下や海岸浸食を招き、生物の往来を遮断し、生態系を決定的に破壊するからである。確かにダムを造れば、水資源を確保し、洪水を調節することができる。土砂で満杯になるまで、ダムは短期的には効果があるといえる。換言すれば、ダムは副作用の多い劇薬であり、使うにしても最後の最後に使うべき手段というべきものであった。しかるに、我々はここ50年あまり安易にダムを造りつづけてきたのである

なお、土砂を下流に流せるダムとして、現在、黒部川に排砂ゲート式の出平ダム(関西電力)と宇奈月ダム(国土交通省)、十津川の旭川にバイパス式の旭ダム(関西電力)の3ダムがある。この試みは画期的なものと呼べるが、黒部川の流れ込む富山湾では、流下したヘドロのため漁場が荒れ、その回復の兆しが見えず、十津川も下流のダム群で再び遮断されるなど、まだ解決しなければならない問題点が多いのである。

3・治水の現状—ダムは副次的存在—

さて今までダムが出来ると、その威容のせいか、絶対に安全でもう洪水は起こらないという『ダム神話』が信じられてきた。しかし、ダムは治水上ほとんどが副次的なものであり、治水の王道は河道改修、即ち「堤防の築造」にあるといえる。例えば、信濃川では、治水目標の基本高水のピーク流量を、150年に1度発生する豪雨を想定して小千谷地点で13,500 m³/sと定め、この内2,500 m³/s分を上流ダム群で調節し、河道に11,000 m³/sを流す計画となっている。即ち、ダムの治水計画上の分担率は18.5%に過ぎないのである。

ところで、この洪水調節に必要な総洪

水調節容量は3億2000万 m³と計算されている。しかし、現在完成しているのは大町ダム、三国川ダム、破間川ダムの合計約5400万 m³に過ぎず、この度中止された清津川ダムの洪水調節容量6000万 m³を加えたとしても、残りの必要容量を確保することはほぼ絶望的な状況にある。即ち、すでに現在の信濃川治水計画は破綻しているのである。

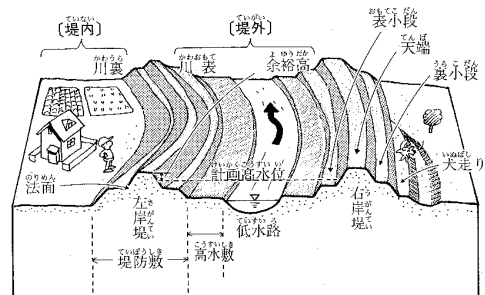


図1・計画高水位と余裕高

表1・堤防の余裕高に関する規定

計画洪水流量 (m ³ /s)	余裕高(m)
200未満	0.6
200～500	0.8
500～2,000	1.0
2,000～5,000	1.2
5,000～10,000	1.5
10,000以上	2.0

それでは、河道改修はどうなっているであろうか？今現在、信濃川小千谷地点下流で11,000 m³/sを安全に流下できない区間は長岡付近から下流となっており、この河道改修が順次進められている状況下にある。しかし、『洪水を安全に流下させる』ための堤防高さというものは、図1のように、計画高水位以上に余裕高を取ることが前提になっている。ただ、この余裕高は表1のように流量に応じて段階的に決められたもので、必ずしも科学的根拠があるものではない。信濃川下流の場合、その余裕高は2 mである。仮に、この余裕高まで食い込んで洪水を流すことを了

(P3へ続く)



解するならば、上流ダム群で調節予定の $2,500\text{m}^3/\text{s}$ は十分流下させることは可能である(例えば、長岡付近を想定して、川幅を800m、余裕高2mとすれば、断面積は $1,600\text{m}^2$ であり、表面流速を約 $3\text{m}/\text{s}$ とすれば $4,800\text{m}^3/\text{s}$ の洪水を余分に流下させることができる)。

しかし、余裕高まで食い込んで流すことには堤防の安全上不安があるという反論がある。しからば堤防を補強すればよく、その補強には既に様々な工法が存在している。例えば、連続地中壁工法は、地中に透水性が低く強度のある連続した壁を、幅数10cm、深さ20~30mで、1m当り約50万円で造ることができる。仮に、小千谷から下流両岸約100kmの堤防を補強しても、総工費は約500億円に過ぎない。清津川ダムの建設予定価格は約2,500億円といわれていたが、上流ダム群の総建設費を考えると、堤防強化の方が圧倒的に安いといえる。

以上のようにダム群計画の達成が程遠く、河道改修が未完成な状況は、信濃川に限らず、阿賀野川、石狩川、利根川、吉野川など全国の多くの川が似たような状況にある。この未完の状態に対して国土交通省はどう決着をつけるのか明解な回答を出していない。また、河川工学上でも、この問題に対してどう解決するか十分な議論は行われていないのである。

4・治水安全度は選択の問題である

今までの治水計画は、行政の技術者が『河川砂防技術基準(案)』に則って計画し、唯一解のように地域住民に提示し、押し付けてきた。しかし、こうした計画のほとんどが地域住民から認知されず、未完に終わろうとしているのである。元来、治水安全度は、地域住民がどの程度の水害まで受忍可能であり、安全性をどこまで要求するかによって決めるべきものと

考える。

1997年の河川法改正では、20年から30年の河川整備計画には地域住民の意見が反映されるようになった。しかし、基本高水やダムと河道への配分を決める河川整備基本方針に関しては、中央の社会資本整備審議会(河川分科会)や県の河川審議会などで、地域住民の意見を聞かずに決めることができる。即ち、治水安全度の決定は、いまだ地域住民の関与するところではないのである。

しかし、民意はダムを忌避し、脱ダムによる治水安全度の低下は受忍するという時代になった。安全度を高くし、ダムを造ることによって、さまざまな環境破壊を招き、膨大な借金を背負うよりは、川が溢れることを受忍しようということである。即ち、河川整備基本方針まで住民が決めることを要求しているのである。

おそらく日本の多くの川で、現状の治水段階であれば人の一生のうち氾濫を1,2度経験するかもしれない。しかし、たとえ堤防を越流したとしても、破堤さえしなければ、日本の洪水ピーク時間は短く、越流量には限界があり、被害は小さくてすむ。堤防を、連続地中壁工法などで越流しても破堤しない堤防にすればいいのである。また、越流によって床上浸水の可能性のあるところでは、補助金を支給して家を高床式にすればいいのである。この高床式化は、今の家の建替え年限からすれば30年程度で完結可能である。

地域住民に治水安全度の選択を可能とする法的整備を急ぐことが、今の民意に答えることであると考えている。

[本稿は、(社)新潟県地域総合研究所「ニューズレター」2000.10に掲載したものを修正したものである。]

万代橋重要文化財化について—課題点の解決に向けた私案—

新潟市を流れる信濃川に架かり、新潟のシンボルとして市民に親しまれている万代橋。その万代橋を重要文化財に指定しようという活動が最近活発になってきており、万代橋ワークショップ等が開かれている。これに参加してみて、いろいろ課題があり、今後議論を煮詰めていかねばならないことが分かった。そこで、その解決の私案をここに紹介してみたい。



70年以上新潟のまちを支えている万代橋

万代橋の重文化において現在主な課題となっているのは高欄と街灯についてである。これらは戦時中の鉄材供出によってその原型を失ってしまっており、さらに数回の改修がなされているため、建設当時とはかなり違ったものとなっている。

まず高欄についてだが、意匠的に建設当時と違うところは金属製の格子部分だけである。しかし、高欄に関しては特に高さをどうするかは課題が残る。現況の高欄の高さは約85cmであるが、防護柵設置基準によれば110cmが必要であり、約25cm足りないことになる。そのため、本来の高欄の高さと基準の高さの折り合いをどの様にするかについて、全国一律の基準のあ

り方について、市民の議論を深めていく必要もあると考える。

ここで高欄への対策（私案）を提示したい。一つ目は高欄の土台を同じ素材で足したり、格子の部分だけを引き伸ばすというような方法だが、これでは橋の外側から見たときの景観が崩れる危険性もある。本来、万代橋はアーチの美しさをその頂点部の薄さでよりいっそう美しく仕上げている。そこには高欄との整合性も含まれていると考えられ、単なる底上げではその美しさが損なわれる恐れがある。

二つ目としては、別のものを付加して高さをかせぐ方法である。例えば鉄製の手すりのようなものを新たに付け加えたりすることだが、その後の違和感是否定できないだろう。



犬矢来（いぬやらい）
京町家レポートより

<http://www.hachise.co.jp/machiya/index.htm>

三つ目に高欄に犬矢来（図参照）のようなものを設置し、人を近づけなくさせることで擬似的に高さを得る方法である。この場合、法的なものがクリアできるのかということや、高欄に近づいて景色を楽しむようなことができなくなるといった問題が生じる。

次に街灯に関してだが、建設当時のものはガス灯を模したデザインのもの

（P5へ続く）



であり、電車の架線をかける予定であったので柱も直径30cmという大きなものであった。この街灯を復元すれば、確かに万代橋はより意匠的に優れたものになるかもしれないが、十分な照度を得られないという問題等が生じる。これには街灯の本数を増やす方法などもあるが、他に足元からの照明によって照度を補うなどの方法も考えられる。また現況の照明でも、アーチの連続性を妨げている柱を内部に埋めてしまえば、それでいいのではないかという意見も少数だがあった。

ここまで高欄と街灯について課題点とその解決策（私案）を提示してきたが、これら以外にもよい方法があるかもしれない。しかしいずれにしろ、議論だけではそれがどのように影響するかわからない。ここは実際に実物大の模型を造り、どの様な方法が適しているか試しにやってみるということも重要なことではないだろうか。

ただし文化財にはauthenticity（真正であること）を重要視する考え方もある。いっそのこと何も手をつけない現況のまま重文の指定を受けるというのも一つの方法ではないだろうか。課題の解決には私が述べた他にもたくさんの方の手法があると思う。いずれにしても文化財として、あるいは社会基盤としての万代橋はどうあるべきなのかという視点から、たくさんの方々が更なる議論を深め、美観や安全性の折り合うところを探っていかなければならないと思う。

新潟大学工学部建設学科4年
佐藤 誠

次回は民『民』が主体で Eポート試乗体験会レポート

Eポートとは1995年、比較的安い値段で誰もがすぐ漕げて、10人程度乗れて交流に役立つことをコンセプトに作ってポートです。とにかく水面での人々の交流に使ってもらおうという想いを形にしたものです。Eはエコライフ（Eco-Life）、体験（Experience）、環境（Ecology）、教育（Education）などを表す頭文字 "E" からとったものです。

このEポート大会も新潟市内では5年前から信濃川やすらぎ堤で、国土交通省や新潟市などが主催する信濃川フェスティバルの一環として行われてきました。今年も8月25日に行われ、外国人高校生留学生の参加もあり、年々参加する地域も人も多彩になってきています。開会式では「地球の環境とエネルギーと緊急の教育に利用できるポート、環境生活へ広がる力がわき、対等に交流を楽しめるポート」とEポートのキーワードの英語表現まで飛び出していました。

このEポート大会も来年からは新潟水辺の会で主催してほしいという依頼が現在きています。理由は定かではありませんが、水辺に立つこと、水面に漕ぎ出ることについての気持ちの持ち方かなと想います。新潟水辺の会は多くの人々に水辺や川の流れを体験してほしいと考えています。また川との付き合いの大切さや素晴らしさを伝えたいと思っています。

来年からも多くの市民が日本一長い（？）信濃川の最下流でのEポート大会で水面で楽しく遊びながら、水の色や臭い、冷たさや暖かさの感じから、近くを通るアナスタシアを眺めながら、また上流のまちや山への思いなどを通じて様々なことが体験できるように汗を流し、運営に責任を持っていきたいと思っています。

世話人 進 直一郎

板合せへの熱い想いに感謝！感謝！

「私が小さいころ家にも隣近所にもあったわ」と基金に想いを寄せていただいた彼女は懐かしそうに語った。通船川だけでなく、新潟周辺下越地方の広範な地域に一家一舟状態だったのではと思った。板合せ基金と船着きのレポートをします。(第1号は当会のシンボル「カワセミ号」としました)



板合せ舟カワセミ号進水 2002.8.25

現在、基金は11月29日現在で49名(団体含む)から637,000円をご寄付いただき、当面の目標まで後20万円程となりました。こしじ基金の助成から30万円、通船川・栗ノ木川ルネッサンスから10万円をはじめ、たくさんの皆様からご協力いただきました。ありがとうございます。遠くは三重の方県の会員から、大口の方は信濃川ウォーターシャトルの1株分5万円の寄金をいただきました。感謝！感謝です。

本体や運搬・塗装の支払いは完了していますが、10本の櫂は高橋裕雄世話人に制作依頼中です。またライフジャケットや保管のカバーなど他の必要器具も出てきました。できれば、板合わせの歴史や分布、物語を載せたパンフレットも作りたいですね。(誰か板合わせ研究調査してくれないかな？調査資金はどこから捻出します。希望者は事務局まで。)

この復元川舟「板合せ」は、川と人との関係づくりの復元で目的を達成しますので舟の船頭さん、舟の利用、舟の展示、舟の解説ガイドなどの活用条件整備が課題です。板合わせ担当チームの高橋裕雄世話人、星島副代表などを中心にそのプログラムが

検討されています。当然、このような小舟が100艘通船川に浮かべば川は再生すると豪語したのが私なのでその戦略プログラムも急ぎ研究しなければと思います。川沿いの企業・商店・学校・公共施設・自治会などにそれぞれ一艘ずつオーナーになっていただき舟を使ってもらう。学校や福祉、観光、商業、防災避難に利用する。通船川を舟で往来する人々でいっぱいにして、外輪船かナロー・ボート就航の環境条件をつくる。などの戦略研究です。

板合せの「舟着き」の確保を

まずは第1号のカワセミ号を通船川に定着させるために「舟着き」を確保したい。現在舟は山ノ下閘門の右岸駐車場に仮置きしています。12月23日から始まる「河口森のワークショップ」で舟着きの検討もします。そこで舟着きの展望が開かれると思います。ぜひ参加してください。

デモンストレーションをします。来春3月の山ノ下新排水機場オープン時に、4月の花筏の通る時期、5月の連休に、6月のクリーン活動時にデモンストレーションします。船頭師は、星島さん、松野さん、丸山さん、大橋さんなど多士済々の面々ですね。きっと俺も俺もと船頭師が登場するはずですよ。並行して、木戸の5つの商店会と8つの小中学校などの連携・協働でエコマネー実験が始まりますので、そこでも舟利用が軸となります。

基金は当分継続したい

などなど考えるとこの「板合せ基金」ITAWASE FUNDは当分継続したいと思います。是非寄金と使い道への提案をお寄せください。例えば、カワセミキッズクラブの開設で子ども船頭師の養成など。

世話人・事務局長 相楽 治



通船川エコマネーの実験

木戸地区の商店会の現況は先の見えな
い不況の中に郊外型超大型店の進出等
で消滅の危機にあります。一方では工夫次
第で不況を克服（高齢者対象＋地域ニ
ーズ）した数少ない地域商店会もあるな
ど情報誌で紹介されています。



通船川クリーンアップ大作戦

そこで私達の地域で考えられる手法と
して通船川を活かしたエコマネー（地域通
貨）の活用法について過日（9月12日）
木戸地区サービス業及び商工振興連合会
（木戸地区5商店会加盟）の定例会にお
いて相楽さんを講師にお招きして研修会
を行い今後前向きに取り組むことを確認
しました。

通船川には、ゴミを捨てる人・拾う
人・植物を調べる・草を刈る人・木を育
てる人・船で川下りをする人・筏をあや
つる人・河川改修を進める人・そして小
中学校の総合的学習の学びの場として年
間数千人の人々が様々な役割を持って関
わっています。

ゴミを捨てる人・釣り人・筏をあやつ
る人・河川改修する人を除けば何らかの
ボランティア活動をしている人々です。
さらに通船川の再生が進めば「川を守る
人」「川を育てる人」ボランティア人口
が増加する可能性が考えられます。

そのボランティアの「善意を支えるエ

コマネーの利用法」を相楽さんのご指導
を受けながら学校と地域商店会で実験し
てみたいと考えています。

学校と地域の実験

- 1.総合的学習に地域の複数人にお手伝い
を要請しますが予算がなくて困っていま
す。
- 2.地域の人は子ども達に通船川・栗ノ木
川を体感して川の存在感、川の環境を知
ってもらい「守る・育む」を伝えたい。

そこで次の方法で循環型エコマネーを
利用します。単純メリット 学校は、総
合的学習について多角的な取り組みにエ
コマネーで予算が自由に組める。子ども
達同士で「教えられること」「教えて欲
しいこと」にも利用が考えられる。

地域は、ごみ拾い・草むしり等の場所
指定・学校と子ども達との総合交流意見
交換がしやすくなる。土日を問わず学校
を通じて行事に子ども達の参加を呼びか
けられる仕組みが考えられる。

商店会は、エコマネー持参の方にサー
ビスポイントとして何パーセントかを割
り引く（新しい顧客の開拓）。貯まった
エコマネーは「福祉施設に寄付」をする。
福祉施設は施設ボランティアに利用す
る。

以上を循環型のエコマネーとして実験
したいと考えています。

星島 卓美

お知らせ

平成15年3月30日（日）
新山の下排水機場完成記念オ
ープンイベントを開催しま
す。お楽しみに！

通船川・沿川緑化の現在

通船川・沿川に苗木を植え始めて7年がたつ。精力的に苗木を植えたのは初めの3年だけだったように思う。以後は国土交通省の暫定的公式見解である「河川区域内の植樹基準」という規制に縛られて遅々として進んでいない。この状況は基本的に変わっていない。「堤防上の樹木の根が堤防の構造物に影響を与える」ということらしい。この問題を考えるとき、その解決の方法をどう考えたらいいのだろうか。



人為の堤防、それは人の財産、生命を川の脅威から守るために作られた。過去に様々な河川の氾濫によって多くの財産と人命が失われたことは事実であるし、その不幸を繰り返してはならないという意味を否定するつもりはない。自然堤防、それは河川が氾濫を繰り返してゆく過程で川の流速が遅くなるところに堆積した土砂によっておのずから作られた。そこは動植物を問わず生きる物のすみかであった。こう考えると堤防の作り方の作法とは人と自然の関係そのものであることがわかる。そうであるなら堤防をどうつくるかを官だけに任せておくわけにはいかない。2002年の今日、日本の最大の問題の一つは人と自然の関係の再構成である。

私はこのところ明治以前の人々の暮らし方、つまり江戸時代を21世紀の生活モデルとして回復できないか?と考えたりしている。私達の本当の困難はこの薄汚れた通船川に象徴される工業社会の限界を確認することにあり、そのうえで私たちの子供と孫に何を伝え、残していったらいいのかが判らなくなっていることにある。

それは明治以来続いた工業化による脱亜入欧と富国強兵というこの国のありようの

功罪を、江戸末期の勤皇と佐幕の志士が開国が攘夷かであらそったなかから明治維新が生まれたように、明らかにすることからしか見えてこないと考えている。

刹那的な豊かさと持続可能な貧しさの振り子の両端のどちらを選ぶのかという悲しい選択をではなく持続可能な豊かさとはなんであるのかを見出すこと。そこにしか21世紀の希望はない。

そう考えると鎖国の中でリサイクルと定常型社会の中から様々の文化を生み出した江戸時代のエネルギーの根源を知ることは地球という閉鎖された環境の中で人が自然と共存しながら、尚快活に生きてゆく作法を見出すことになるのではないかと?

通船川の沿川緑化で官と民の共同作業が始まった箇所があるが、それはまだ実験的な試みという程度のものである。沿川で緑化を認めない場所がほとんどであるといってもいい。当面「植えさせろ。いや駄目だ」という徒勞の押し問答を繰り返すなかから植樹を認めさせるという方法をとるしかない。

実は堤防に木が生えているというだけでは大した寄与を川に対してしてはいるわけではない。それは親水堤防も同様である。問題は都市河川通船川が鳥や魚を養うことができる河川として再生させるための技術を開発と、街の中に自然があることを誇る風土を作り出すことにある。

始まったばかりの官民共同の沿川緑化め試みが試行錯誤を繰り返しながら一つの形を作り出し、さらにその余勢を駆って過剰な利用とヘドロの堆積に絡んだ水質の改善への道筋をつけることで一度は失はれた川の自然の再生能力を回復させられないか。その上で川商売、川市場、川舟の復活、を考えるとというスタイルが川との共生ということではないか?

2002年の年の暮れ、今年の春と秋の草刈隊の活動を振り返りながら持続可能な豊かさ、持続可能なボランティア、江戸の暮らしの3つをどうしたらリンク出来るかを考え始めた。

阿賀に生きるから10年 のんびりとした時を重ねて

映画「阿賀に生きる」がこの春、世に出て10周年を迎えた。早いものである。完成後に亡くなられた出演者のみなさんの追悼もかねて地元の安田町で開催してきた集会もちょうど10回を数えた。この間にも細々ながらも上映会や講演会を重ねてはきたのだが、節目の年でもあり、県都で大々的にやりたいものだといつもの仲間たちに呼びかけてみた。



記念講演「阿賀に生きる」に学ぶ
大熊教授2002.5.4

20歳の若者はあたりまえのことだが、10年前には10歳の子供なのだからまだ見てはいないはず、きっと大勢足を運んでくれるに違いないと、市民映画館シネ・ウインドを思いきって1週間借り切ることにした。その後には製作された佐藤真監督や小林茂監督の作品上映や日替わりのゲストトークもあったものの、やはり一番人気は「阿賀に生きる」だったようだ。最終的には1週間で目標の700人の動員を得て、観客層も若者から高齢者まで幅広く、あらためてこの映画の魅力と底力を実感できた。

「それぞれの阿賀、それぞれの10年」これが最初に考えたキャッチコピーだったが、あまり評判がよろしくなかったようで「にいがたの宝もん！映画・阿賀に生きる10周年記念祭」と変えてみた。登場人物の餅屋のジイちゃん、バアちゃんこと、加藤作二さん、キソさん。舟大工の遠藤武さん。鹿瀬の長谷川芳男さんと、いずれもすでにこの世の人たちではないが、その演技？生き方と逝き方は見事であり、まさに「にいがたの宝もん」だと10年経った今もつくづく思う。

4月から5月にかけての記念祭も無事に終えて、6月には神戸、7月には栃木の上映会と続いた。嬉しいことにいずれも以前にも

上映会をやってもらっているところなのだが、いわゆる「阿賀に生きるファン倶楽部」の全国支部？の人たちが再び企画してくれたのであった。10周年ということもあってマスコミも好意的に取り上げてくれて、その後も県内の小中学校、高校大学と上映会や講演会が、毎月のように予定が入る忙しさだった。

早い頃には、公害授業や環境教育といった時間でよばれることが多かったのだが、近頃では総合学習や道徳教育、同和教育、あるいは地域看護学の授業などにも、お声がかかるようになった。この映画はたとえどんな切り口で取りあげてもらおうと構わないと思う。どのようにでも答えてくれる力があるからだ。もちろん、新潟水俣病事件も次世代に語り伝えていかねばならない主要なテーマのひとつではあるのだが、もっとも根本的な「人が豊かに生きていくこと、死んでいくこと」を、登場人物のみなさん、それぞれがなんとも言えない魅力的なスタイルで教えてくれているのである。

近頃「スローフード」「スローライフ」などという流行り言葉を聞くが、阿賀の川筋に生まれ育ち、お天とうさまと共にマイペースで暮らしてきた、あの3家族にとってはごく当り前のことだったと思う。鮭と対話しながらの鉤流し漁。材料は舟主が用意し、堅い仕事をしてご祝儀をいただくような川船づくり。流木で煮炊きをし、水は一旦瓶に貯めて、電気はこまめに消して使う。いずれもほどほどに、けしてそれ以上欲張らない暮らしぶりは「スローライフ」の元祖、教科書とも言える人たちだろう。

この秋、「阿賀野川、昔も今も宝もん」と言う、ビデオの短編をつくってみた。「たとえ大水で家や畑が流されようと、たとえシモニシ風（川の流れて逆らって吹く風）で川船が転覆しても、たとえ新潟水俣病の被害に遭おうとも『阿賀』は昔も今も宝もん！」ということで、それぞれ現地で当時の苦労話を生まれも育ちも「阿賀の川筋もん」の3人衆から語ってもらった小中学生向け教育ビデオ？のつもりなのだが、よかったらご笑覧ください。

阿賀の川筋もん 旗野 秀人

市民主体の公共事業の社会実験がはじまっている。 英国GWT視察研修報

10月19日から27日まで英国グランドワークトラスト（GWに略）の21年間の成果と100年目の社会実験と言われる新しい公共への取り組みを視察研修してきました。GW47団体と言われる中でGWオールダム・ロッチデール、GWマンチェスター、GWテムズバリーを取材し、コッツウォルズ地方のナショナルトラスト、リーディング大学でのワークショップと濃密な内容のツアーでした。



写真1：青少年が社会復帰するためにコンピューターの基礎を学んでいる。

視察の視点としては、NPO型のまちづくりの展望、PFI手法（Private Finance Initiative）のPPP手法（Public Private Partnership）への進化とは何かの2点です。グランドワークとは、80年代初頭に始まった運動で都市郊外の環境悪化地域の改善を目的に住民－行政－企業3者のトラスト（信託）が組織体として事業をおこなうと理解していました。日本では、「片手にスコップ、片手に缶ビール」の合言葉で活動されています。グランドワーク三島の運動が有名で10周年を迎えています。

研修成果はGW運動の成果と新しい公共についてご紹介します。紙面の都

合で一部しか紹介できませんが、機会があったら続きを紹介したいと思っています。英国でGWを研究し、日本にGWを紹介しているパーミンガム大学アジア研究所客員教授の小山善彦氏と環境省地球環境局総務課補佐中島恵理さんの論文や現地GWの資料、ヒアリング取材したものです。



写真2と3：犯罪の場となりやすい路地が住民の手で快適な場所になった。ただし路地の入り口に鍵付の扉ありだが。

●2つの背景要因／この運動がでてきた背景として、1.都市の衰退（経済・環境・社会問題）2.サッチャー政権の行政改革があります。概観ですが19世紀まで公共はNPOが行うという流れが20世紀に福祉国家論が台頭し行政依存のわが国のような体質の社会になり、80年

（P11へ続く）

代にイギリス病といわれる状況になった。そこにGW運動の登場する素地があります。そこに97年労働党ブレア政権が誕生したため、現場ではGW運動の段階を越えた社会変革運動、「新しい公共」の社会実験に踏み込んでいる印象がありました。(27日NHK特集「変革の時代」で再確認できました。) "Change Place Change Life" がGWの新しいテーマです。



写真4：ロンドンにつながる古い運河はいまでも利用されている。

●英国の地域再生政策から学べるものとして次の6点。(小山・中島論文より)

- 1) 行政主導行政から官と民とのパートナーシップ行政への移行
- 2) ハード中心から“ひとづくり”“コミュニティづくり”の社会資本形成、
- 3) 環境・経済・福祉・教育・犯罪などへの統合的な取り組み
- 4) 新しい政策手法の社会実験と成果の全国普及
- 5) 多様な形態・機能を有する第3の主体の役割
- 6) 地域再生政策と市民社会への影響

●GWの条件／設立には、1.困難な地域に、2.国・自治体（企業）の6年間の出資契約、3.異なるセクターからの代表の運営、4.独自の予算の確保（国事業へのアクセス）、5.専門家チームの雇

用、6.具体的なアクション＝小さな事業の蓄積、という条件があります。

●GWオールダム・ロッチデール／人口40万人の両市をまたぐ84年設立の6番目のGWです。92年ごろはポケットパークや森林地帯の造成、工場周辺の整備、水路の管理という田園地帯の自然環境の改善で有給スタッフ25名、事業収益1億円でしたが2000年度現在では有給スタッフが100名（大部分が有給実習生）5億円の収益といます。GWが田園地帯の事業から都市内の再生に適用され「コミュニティガーデン」「若者研修」「職業訓練」「企業の環境事業サービス」に取り組んでいます。

●GWマンチェスター／MUと言えばワールドカップ新潟戦で沸いたベッカムの街です。プレミアリーグに2つのチームが出て活気がある半面、この都市も産業の衰退で多くの工場跡地や古い住宅が残っています。GWはコミュニティの再生として住民参加での路地公園づくりに取り組んでいました。

●GWテムズパリー／ロンドンのテムズ川上流にあるまちを基盤としているGWで川沿いのカントリーウォーク利用などテムズ川沿いの事業連携を進めている。電力会社の空き地を活用した自然学習センターでは企業のスポンサーを得て知的障害者の癒しの活動などを行っている。

世話人・事務局長 相楽 治

北陸の水路(堀や川)を巡る旅 紀行文

掘割再生物語プロジェクト実行委員会「他事例研究部会」は、「NPO法人新潟水辺の会」と共催で「北陸の水路(堀や川)を巡る旅」を行なった。

11月23日(土)一行21名(男性13名、女性8名)は、午前8時 新潟駅南口をバスで出発、新潟西インターから北陸自動車道を石川県七尾市に向かった。

バスの中で途中の風景を見ながら、大熊先生より講義を聴く「黒部川にダムを作ったため、土砂の流出が少なくなり海岸線が後退している」「富山県はかつて石川県の一部であった」「散居村」「かすみ提」「天井川」「コンクリート畦」等の講義があった。



メインストリートと一体となり整備された御祓川

七尾市 御祓川にて

午後1時予定通り七尾市の御祓川に到着した。(株)御祓川 森山 奈美さんらの出向かえを受け、昼食は「いしり亭」にて地元の魚醬で煮込んだ魚介類が美味でした。

昼食後2階の研修室にて、御祓川の再生に掛かっている人達の紹介後、森山さんより説明を受けた。

御祓川は古くは、禊が行なわれた川である。市街地では川幅が狭く洪水が多かった。そのため桜川放水路を昭和43年より拡張し48年に完工した。分流点に水門を取り付けたため、水の流れが変わった。また地盤沈下、生活排水等で川にヘドロがたまり川が機能を失くなった。

川の再生のため、港にある「七尾フィッシャーマンズ・ワーフ(年間60万人の集客)」と七尾駅前再開発のパトリア(平成7

年完成)の2つの集客の核を結ぶメインストリートに、御祓川700mを軸として、町の側から川を再生しようと、川の近くに店を作り、人を寄せ集めながら川沿いに魅力づくりを進め、「川と店のかかわり」「川と市民のかかわり」を作るためイベント、情報の発信をおこなっています。

御祓川の前で川の整備状況説明を受けた。また3つの橋にそれぞれ「あかり・かおり・かざり」と祭文化の個性を持たせている。



御祓川について説明を受ける参加者

御祓川は上流の方で大熊先生のアドバイスによる「パッキ方式」の手作り浄化装置で水質浄化にも取り組んでいる。当日の透明度は36cmだった。

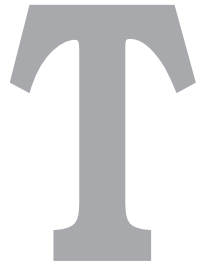
午後3時森山さんと今晚の再会をきして別れ、次の訪問先「西田幾多郎哲学記念館」に向かった。

午後4時 字ノ気町の「西田幾多郎哲学記念館」は、青い日本海の見える砂丘の上にあり、建物は建築家の安藤忠夫氏の設計で建物の内外ともコンクリートの打ちっばなしが特徴的だった。新潟県内で安藤忠夫氏が設計した建物は豊栄市の水の駅ビュー福島湯や建設中の豊栄中学校等がある。

午後5時 記念館を出発後金沢のホテルに向かった。ホテルにチェックイン後、今晚の懇親会会場 市内片町の「鯛組」に向かった。

午後7時「鯛組」ここでは明日の用水を案内していただく地元の「宮本さん夫妻」「上坂さん」「石川さん」「高橋さん」「水野さん」と七尾市より「森山奈美さん」が参加し、親睦の懇親会を開催した。

(P13へ続く)



懇親会の席上で上坂さんより「金沢市用水保全条例（H8施行）」の4つの基本方針の説明を受けた。

- 1.用水の景観 2.開きよ化の促進
- 3.清流の確保 4.用水の利用

午後9時30分 盛り上がりも最高潮に達したの後閉会。各自各々夜の金沢の水辺を見学して、宿泊のホテルに戻った。

11月24日(日)午前9時ホテルを出発 長町研修館駐車場バス下車、地元の上坂さん、宮本さんに金沢の用水を案内していただいた。



金沢の風情を醸し出している大野庄用水

大野庄用水・長町武家屋敷

江戸時代以前より利用され、以前は川であった。金沢城築城に大きな役割を果たしていて、御荷川と呼ばれていた。下流では農業用水、町中では生活用水として、屋敷内庭園の曲水として利用し、蜩も生息しています。石垣も古い物が残って、金沢の風情を醸し出している。現在は農閑期のため水量は半分位であった。

鞍月用水「せせらぎ通り」の案内

鞍月用水は犀川より取水し金沢城の外堀として利用されてきた。明治大正期には製糸工場の原動力(水車)としても利用された。近年は用水の上は蓋をして駐車場として利用されている。用水保全条例に基づいて開きよ化され、道路の広い所は歩道を取り、狭い所は歩道が用水に張出している。石垣が新しく積んであり、安心して歩くことができる。開きよ化については地元の商店街との議論に時間がかかったのだと思う。

辰巳用水 玉川公園

兼六公園の落ち水である。玉川公園の脇に旧堀が復元されていた所を見学した。

午前11時30分 犀川の桜橋南詰の上流にある「とよ島」で昼食。目の前に大野庄用水の取水口があり、桜並木と川沿いの家が低いため遠くまで良く見渡せる。

富岩運河・松川

午後0時30分 金沢出発 次の見学地富山市の富岩運河「中島閘門」に向かい午後1時30分に到着した。富岩運河と神通川は2.5mの水位差があり、パナマ運河方式で船を上下させて通過させる。大きさは長さ60m 幅9m深さ6.3mで200トン数級の船が通過できる。昭和3年に着工し、昭和10に完成したものである。閘門の扉が古くなり平成10年3月に修復した。リベット15,000本合掌部はヒノキ材である。平成10年5月に「富岩運河水閘施設（中島閘門）」が国の重要文化財に指定された。



富山駅北部の再開発と富岩運河

その後富岩運河の上流に行く。上流は「富岩運河環水公園」で運河上を橋で結ぶ展望台があり、周囲に芝生が張ってある。最上流部は富山駅北部再開発のビジネス街と直結し、ウォーターフロントとして活用されている。

次に富山城址公園を流れている松川を訪れた。松川は神通川の旧川である。水は多少濁っているが、春には桜の花が咲き、松川べりを遊覧船が行き交い、市民の散歩道になっている。兩岸にはベンチや彫刻が置いてあり、川の歩道に手摺や柵がない。

午後6時30分新潟駅南口に到着「お疲れ様でした」
「新潟にたくさんの夢をあたえてくれた旅でした」

掘割再生物語プロジェクト実行委員会
副会長 嶋田 正章
(写真：他事例研究部会 森本 利)

こどもに感動、元こどもには希望を 阿賀野川流域子供交流会

阿賀野川流域の福島・新潟両県の子供達が交流することで、未来に向けた流域交流・連携の種まきができないかとの取り組みは昨年からの福島県のアクションで始まった。今年は両県の主催となり、7月20～21日には福島県内、8月20～21日に新潟県内でこの交流会は開催された。

両県からあわせて40～50人の子供達が寝食を共にし、感動を分かち合った。

7月の福島県開催の時は、福島県地域づくり推進室の加藤泰広さんらがコーディネートを行った。8月の新潟県開催の時は五泉市トゲソを守る会、新津市育て！ガキ大将を考える会、ねっとわーく福島方潟、通船川・栗ノ木川ルネッサンス、阿賀野川・磐越道連携会議の協力をいただきながら水辺の会が中心に、コーディネートを行った。

この事業は新潟県が水辺の会に運営を委託する形で行われた。いわゆるNPO法人新潟水辺の会は初めての受託事業である。

私は事務方としてこの事業の組み立てに携わった。

普段つきあいのない子供達をまとめてお世話をするにも、自分の子供の面倒もまともに見れない自分には、一緒に運営にあたっていただいた皆さんからのアドバイズがととても有り難かった。

福島県での活動は主に森林に入っただけの作業体験や観察会であった。残念なことに、行政が中心に組み立て運営を行っていたこともあり、県境を越えて大人達の交流のきっかけづくりができなかったのは残念であった。もちろん、福島県の加藤さんたちは熱心に取り組んでくれたおかげでうまく活動ができたことは、あらためて感謝の気持ちを込めて念押ししておきたい。

新潟県開催では、この催しの運営に参画していただいたみなさんの活動フィールドをみてもらおうということで、どちらかというと「見て歩き旅行」的になってしまい、子供達が一緒に何かを体験し、その感動を共有することから交流できたのかを考えるとしら自信少し戸惑ってしまう。

しかし、一緒にこの運営にあたったみなさんとは来年はもっとうまくやろうと、さらに意気込んでいる。

今年は、それぞれの顔、得意なことなど

がお互いやっと見えてきたというステップではないかと思われる。



全行程終了後のスナップより、なんともイイ顔だ。(左ガキ大将の竹村チヨ子さん、右通栗ルネの星島卓美さん)

今回は新潟県側のグループに何か連携してみようよという気運が高まってきたのがお土産だった。来年は福島のグループと手をつなげることを期待したい。

来年はそれぞれのグループの得意なところを組み合わせて、「無我夢中でぶっ倒れるまで川で遊びまわろう」ようなプログラムが組み立てられたらいいと思っている。

何よりもやってよかったなと思ったことは、新潟県開催の終わりに、参加した子供達から私は取り囲まれ、「来年はスタッフとして手伝うから、絶対さそってね」と涙まじりに訴えられたことであった。

人の気持ちは時間とともに変わってしまうこともあるかもしれないが、その時の言葉はきっと本物だろうと思う。そんな気持ちを持つ子供達が年下の子供達のリーダーシップがとれるような勉強会を、今回のグループなどが連携して積み重ねて、次の開催ができれば、本当に次世代の交流の種が芽吹くかもしれないと感じている。

参加してくれた子供達、そして、今回の催しに人力いただいたかつての子供達にあらためて感謝の言葉を申し上げたい。

私的な出来事だが、お父さんはこんなこともやっているというのを見せようと、せっかくの機会なので自分の子供を連れていった。初めて父と子の2人で出かけたうれしい旅でもあった。

お世話係 杉山 泰彦



水辺の会 2002年から2003年へ 事業をふりかえる

2002年

主催事業

- 3.30 「こしじ水と緑の会」から自然保護助成基金の認定を受ける
- 4.29 春の菅名岳登山
- 5.25～26 長野県新潟県合同研究会「千曲川信濃川考流会」秋山郷「萌木の里」
- 7.20-21、8.20-21 阿賀野川流域子供交流会
- 7.24 水辺の会臨時総会
事務所移転を承認
- 8.20～21 阿賀野川流域子供交流
- 8.25 「板合せカワセミ号」進水式
- 10.6 佐潟ハス採り大会
- 11.23～24 北陸の水路（堀や川）をめぐる旅 22名参加
- 12.7 水辺シンポジウム、望年会

協働・支援事業

- 1.22 通船川クリーンアップ 新潟大学付属小学校とともに
- 1.26 通船川ワークショップ ジャスコ
- 2.17 第2回堀割シンポジウム「にいがたの堀を解く」広松伝さんの最後の講演になりました。
- 3.8 子供環境会議 東地区公民館
- 5月 「通船川物語」出版
- 5.3 柳都大橋誕生祭で花筏制作
- 5.18 通船川親子釣り大会
- 5.25 通船川クリーンアップ
- 6.8 栗の木川公園草刈り
- 6.30 通船川草刈り隊
- 7.6 通船川中流ウォッチング
- 7.13～14 川の日ワークショップ 牡丹山小学校三人組参加
- 8.9 信濃川水系24時間一斉調査（通船川山ノ下閘門）
- 8.25 2002信濃川フェスティバル、Eボート大会参加
- 9.1 通船川クリーンアップ150人参加
- 9.7 第9回通船川・栗ノ木川下流再生

市民会議

- 9.10 牡丹山小学校通船川船下り
- 9.29 通船川草刈り隊
- 10.12 流域交流
- 10.26 第3回堀割シンポジウム「にいがたの堀を探る」
- 10.26 つうくり市民会議水質部会
- 11.16 鷗島ワークショップ
- 11.17 堀割まちあるき&堀端会議ワークショップ
- 12.7 つうくり市民会議水質部会
- 12.23 通船川森のワークショップ

協力事業

- 6.30 新潟市環境フェア
- 7.5 自治研究集会「土方レポート」発表
- 7.20 AFSセミナー 講師協力：風間、進
- 7.20 信濃川ウォーターシャトル「ベアトリス」進水式
- 7.27 夢海岸フェスティバル
- 9.27～28 第6回新潟県環境NGO大会 長岡
- 10.18～20 都市景観まちづくり会議函館大会
- 10.22 新潟社会貢献活動フォーラム 森本パネラー参加

2003年イベント情報

- 1.25 阿賀野川流域連携シンポジウム
- 2.11 通船川森のワークショップ
- 2.16 堀割シンポジウム
- 2月 水辺の会総会
- 3月30日 新山の下排水機場完成記念オープンイベント

紹介しきれない出来事もこの他にもあると思います。誌面の都合上紹介できなかったものについてはお許しください。

とりまとめ 森本 利

新潟市長に会員の篠田昭さんが当選した。全くの民間人が当選し、「水の都」と標榜する新潟市の長になったところに意義がある。投票場に行くのも億劫な私自身も、今までならお手並み拝見などと言っておればよかった。なにしろ忘年会でいつもすぐ隣にいた兄貴が市長になってしまったのだから、放ってはいられない。今後市町村合併が進めば、信濃川と阿賀野川、鳥屋野潟と佐潟のほかに福島潟を含む70万都市となる新潟市の舵取りにどんどんモノ申そうではないか。

水辺の会だけでなく市民にとっても水辺や舟運に関する活動は重要な意味がある。信濃川に浮かぶ二艘の船。白砂青松を復元してほしい海岸線。昭和39年までに絶滅させた新潟島や沼垂の堀。住民の関心を集めても、どぶ川でしかない通船川。ラムサール条約登録後、来訪者が増えつづける佐潟。重要文化財登録を間近にひかえた万代橋、などなど。やはり新潟は水の都なのだ。

久しぶりに石川県七尾市、金沢市、富山県富山市の堀を見学した。どぶ川度は通船川以上の七尾の御祓川に住む人たちは明るく愉快だ。金沢の大野庄用水や鞍月用水に住む人たちは、残念ながら顔が見えてこない。「勝手に工事してた」と言う住民にも出会った。歴史や文化を大切に水辺のまちをつくる取り組みに、新潟にはこれほど上手なものはない。新潟は金沢や富山ほど美しくはないが、七尾と同様に人が面白い。水辺とまちづくりが一体化していて、これから末永く楽しめるまちなのだ。

30号から「水辺だより」を編集を担当して8年が経過した。その間、ダム問題などさまざまな水辺にかかわる出来事がおきた。少し乱暴な言い方をすれば、多

くの軋轢は、現在の法律と時代の流れのギャップが要因の一つだ。全国一律の基準で水辺を造ろうとしても各地域で歴史・文化などがことなり、受け入れがたいものとなる。例えば万代橋のように70年以上にわたって愛され、まちの発展につくした橋の原型復旧工事も現在の基準とは矛盾する工事となる。今後は各地域の歴史・文化と安全性などを考慮した社会資本づくりを、地域の責任において住民参加の十分な議論をもって納得づくで行なうことが必要だ。火災に遭った大阪の法善寺横丁では権利者全員が元の風情を残したまま復興することに同意し、大阪市に建築基準法の特例適用を求める手続きを行っている。

これまで水辺とは直接的に縁のなかった商店街、食イベントや寺町からのまちづくり人と水辺の会の連携が進んでいる。そのエネルギーの一部が新市長誕生に大きく影響した新潟は「おもっしー」まちなのだ。軋轢を恐れず責任を分かちあいながら新市長とともに話し合いでまちづくりを進めよう。

編集鳥 高橋 正良

mtakahashi@southernwind.co.jp

入会案内

この会は、遊び心半分・真面目心半分で活動しています。ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。

自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。

今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。

この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年：1987年10月15日 ■目的：水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。 ■代表者：代表 大熊孝（新潟大学工学部教授） ■会員数：個人175名・法人9団体（2002年11月現在） ■活動：水辺シンポジウムの開催/水辺ウォッチング/会報「新潟の水辺だより」の発行/水辺環境整備に関する学習会/長野県富山県の水辺グループとの交流会/通船川、佐潟の調査・研究etc.

■年会費：個人会員一口1,000円を2口以上、賛助会員（法人など）一口5,000円を2口以上

●発行：特定非営利活動法人 新潟水辺の会

●事務局：〒950-0024 新潟市河渡2-2-8

Phone 025-270-9207

Fax 025-270-9207

e-mail: info@niigata-mizubenokai.or.jp

ホームページ

http://www.niigata-mizubenokai.or.jp/

事務局からのお願い

インターネットメールで随時会員の皆さんに情報をお届けしています。メールアドレスを新しく持った方、アドレスを変更された方は事務局まで御一報ください。

入会申込書

フリガナ氏名		男・女
		歳
特技や水辺への想い		メールアドレス
住所	〒 () -	
職業		
勤務先	〒 () -	

注) 紙面の都合上、縮小しています。250%程度拡大コピーをしてご使用下さい。